

## はじめに

わかったと感じるとうれしくなり、自分を愛しくさえ感じてもっと知りたいという知的意欲が湧いてくる。反対にわからないと自分がいやになったり悲しくなったりしてストレスがたまり、わかろうとする意欲がなくなっていく。わかったという思いは、知的活動への意欲、自分への評価に深いつながりをもっている。

読書は、わかる、わからないという思いをダイレクトに感じる営みである。読む本がわからないと読みたい気持ちが薄まり、それが続くと読むことが嫌いになる。嫌いになると読書の楽しさやときめきを感じるチャンスを失い、感動や知識や情報を得ることができなくなってしまう。それは、読者にとっても、著者にとっても、たいへん残念なことである。

本書は、このようなわからない思いを常に抱いている読者を対象とする LL ブックについての解説書である。「わかる」ことから読書がひらかれ、わかりやすさに配慮すれば、読む人、伝わる人が増えていく。本を読んで、わかった、面白かった、共感した、なるほどこういうことだったのか、このように考えることができるんだなどという読書経験を、知的障害者を中心とした読むことに難しさをもつ人たちにどのように提供すればいいのか。LL ブックは、その問いに応えるための本である。

筆者は 2009 (平成 21) 年に、『LL ブックを届ける：やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読者へ』（読書工房）という著書の冒頭で、以下のよう記している。

(前略)「文字が読めない人、読めても内容を十分に理解することに困難をもつ人が、本を読むことができないのは当たり前」という文言は、残念ながら常識として通用することだと思います。

しかし、「その常識は変わりますよ」ということを、この本で伝えた

いのです。

LLブックのLLとは、スウェーデン語のLättlästを省略した名称で、日本語では「やさしく読める」という意味である。スウェーデン由来の「LLブック」という名称を国内で初めて使用した理由は、スウェーデンで発祥し発展してきた根底に流れる「すべての人が平等に読書を保障される権利」をLLブックとともに日本でも発展・普及させたいという思いからである。

それから十数年経った今、2016（平成28）年の障害者差別解消法や2019（令和元）年の読書バリアフリー法の施行によって、いかなる障害をもっている人にも読書が保障されるべきという考えが知られるようになった。読書のできない人もいるという認識は、図書館や教育・福祉関係者の意識の中では確実に変わってきたと感ぜられる。そして、数社からLLブックと銘打つ本が出版されるようになり、所蔵する公共図書館も増えつつある。またその数館が知的障害者への読書支援のために代読ボランティアの養成や活動を開始し、わかりやすい情報提供の必要性を唱える人たちがリライトやニュースの発信を始めている。2009年にはまだ限られていた読書保障への取り組みが、少しずつ増えてきた状況なのかもしれない。

しかし、課題はまだ山積している。読者のさまざまなニーズに応える良質で多様なLLブックが、読者が選べるほどに数多く制作・出版されているだろうか。はたしてLLブックは最も必要としている知的障害者に届いているだろうか。実際、彼らに読む楽しさを与えて生活を豊かにしているだろうか。今後、知的障害者らへの読書支援のネットワークが形成されるためには、さらにもっとLLブックを進める必要がある。わかりやすく、生活年齢に応じた興味に応えることができる良質なLLブックを必要な人に届けていく。それをめざして、本書はLLブックについての発展の経緯、基本的な考え方、表現方法や届けるためのさまざまな取り組みや支援などを示すものである。

以下のような章立てで構成している。

1章「LLブックの歴史と活動」では、LLブックの発生の地であるスウェー

デンと緒に就いて日の浅い日本で、どのようにLLブックが発展してきたのか、社会的な背景を交えながら現在に至るまでの経緯や取り組まれてきた活動について解説する。

2章「LLブックを必要とする人たち」では、読字能力と読解力に難しさをもっている主な読者対象の障害特性や社会的要因を説明し、それぞれの人たちに対応して求められるLLブックについて考える。

3章「LLブックの特徴」では、LLブックはどのような本であるのか、という基本となる特徴を解説する。LLブックの意義、ジャンルやテーマ、難易度、LLブックのわかりやすさを生み出す表現方法、LLブックの多様性について説明する。

4章「アクセシブルな図書づくり」では、アクセシブルな図書の種類、そして図書づくりの現状と課題をLLブックとの関わりに留意しつつ概観する。

5章「LLブックを届ける関係機関等の取り組み」では、LLブックを必要とする読者に届けるために関わっている出版社・書店、当事者団体等、公共図書館、学校図書館等を取り上げ、取り組みの現状と課題などを見ていく。

6章「LLブックを届けるためのさまざまな支援」では、必要とする人たちに、LLブックの存在を知らせ、直接届けるための読み聞かせや代読による支援と、教育、福祉、医療の分野で実際に行われているさまざまな取り組みを事例を通して紹介する。

本書は、各種図書館における障害者サービスや読書バリアフリーを進めてきた野口武悟氏と、長年にわたり知的障害児者の読書保障や療育に尽力してきた吉田くすほみ氏との共著である。手に取ってくださった読者が、LLブックへの理解を深め、だれもが生涯を通して読書を楽しめる読書環境の実現に参加していただけることを願っています。

## もくじ

はじめに i

## 1章 LLブックの歴史と活動

---

藤澤和子

1.1 スウェーデン .....	2
1.1.1 ノーマライゼーション .....	2
1.1.2 読者対象は大人の知的障害者 .....	3
1.1.3 LLセンターの出版や活動 .....	4
1.1.4 MTMの業務 .....	7
1.1.5 移民問題とLLブック .....	11
1.2 日本 .....	14
1.2.1 障害者団体（全日本手をつなぐ育成会）からの出版 .....	14
1.2.2 スウェーデンで出版されたLLブックの翻訳 .....	18
1.2.3 近畿視覚障害者情報サービス研究協議会LLブック 特別研究グループの活動 .....	20
1.2.4 LLブックセミナー等による普及 .....	24
1.2.5 LLブックのこれから .....	26

## 2章 LLブックを必要とする人たち

---

藤澤和子

2.1 さまざまな読者とLLブック .....	30
2.2 障害によって読書に困難のある人たち .....	31
2.2.1 知的障害 .....	31

2.2.2	自閉スペクトラム症 (ASD) .....	35
2.2.3	注意欠如・多動症 (ADHD) .....	35
2.2.4	ディスレクシア (読み書き障害) .....	36
2.2.5	聴覚障害 .....	36
2.2.6	認知症 .....	37
2.2.7	失語症 .....	39
2.3	社会的環境や加齢によって読書に困難のある人たち .....	40
2.3.1	外国人 .....	40
2.3.2	教育を十分に受けられなかった人たち .....	41
2.3.3	高齢者 .....	41

### 3章 LLブックの特徴

---

藤澤和子

3.1	LLブックとは .....	46
3.1.1	意義 .....	46
3.1.2	ジャンル .....	47
3.1.3	テーマや内容 .....	48
3.1.4	難易度 .....	49
3.2	わかりやすさに配慮した表現 .....	51
3.2.1	内容構成 .....	52
3.2.2	読みやすくわかりやすい文 .....	54
3.2.3	写真や絵 .....	61
3.2.4	ピクトグラム .....	63
3.2.5	レイアウト .....	67
3.2.6	用紙・印刷・製本 .....	76
3.3	LLブックの多様性 .....	77
3.3.1	LLマンガ .....	77
3.3.2	写真のLLブック .....	84

3.3.3 仕事をする障害者の一日を追体験できる LL ブック …… 86

## 4章 アクセシブルな図書づくり

---

野口武悟

4.1 多様な読書ニーズに応えるために …… 92

4.1.1 アクセシブルな図書の種類 …… 93

4.1.2 図書づくりの現状と課題 …… 98

4.2 ICT 活用のもつ可能性 …… 100

4.2.1 「本の飢餓」解消に向けたさまざまな施策 …… 100

4.2.2 出版における ICT の活用 …… 101

4.2.3 図書館等での図書づくりにおける ICT 活用 …… 102

## 5章 LL ブックを届ける関係機関等の取り組み

---

野口武悟

5.1 出版社・書店 …… 106

5.2 当事者団体等 …… 108

5.2.1 全日本手をつなぐ育成会 …… 108

5.2.2 行政機関・企業 …… 109

5.3 公共図書館 …… 111

5.3.1 障害者サービスに関わる法制度 …… 111

5.3.2 障害者サービスの現状 …… 113

5.4 学校図書館と大学図書館 …… 120

5.4.1 学校図書館 …… 120

5.4.2 大学図書館 …… 125

## 6章 LLブックを届けるためのさまざまな支援

---

吉田くすほみ・藤澤和子

6.1 当事者とLLブックや情報を結ぶ人によるさまざまな支援 ……	130
6.1.1 読み聞かせとブックトーク ……	130
6.1.2 代読 ……	134
6.2 届けるための取り組み事例 ……	137
6.2.1 読書の楽しさを提供する公共図書館の事例 ……	137
6.2.2 学習への活用を促す特別支援学校図書館の事例 ……	145
6.2.3 自立して生活する力を養う療育での活用事例 ……	149
6.2.4 学校教育の教科学習で活用する事例 ……	154
6.2.5 言語訓練の教材として活用する医療現場の事例 ……	165
6.2.6 当事者団体によるLL版パンフレット制作の事例 ……	171

付録：「LLブックセミナー」テーマおよび講演一覧 177

さくいん 182

# LLブックの 特徴

# 3章

スウェーデンの優れた概念を取り入れ、日本の障害者への十分とはいえない政策や厳しい出版事情の影響を受けながらも、日本語および日本文化に合わせた表現のLLブックが発展してきた。

本章では、LLブックの意義、ジャンルやテーマ、難易度、また、わかりやすさをつくりだす表現方法、さらにはLLブックの多様性について説明する。

## ●内容構成

3.1 LLブックとは.....	46	3.2.4	ピクトグラム.....	63
3.1.1 意義.....	46	3.2.5	レイアウト.....	67
3.1.2 ジャンル.....	47	3.2.6	用紙・印刷・製本.....	76
3.1.3 テーマや内容.....	48	3.3 LLブックの多様性.....		77
3.1.4 難易度.....	49	3.3.1 LLマンガ.....		77
3.2 わかりやすさに配慮した表現.....	51	3.3.2 写真のLLブック.....		84
3.2.1 内容構成.....	52	3.3.3 仕事をする障害者の一日を 追体験できるLLブック.....		86
3.2.2 読みやすくわかりやすい文.....	54			
3.2.3 写真や絵.....	61			

## 3.1 LLブックとは

---

### 3.1.1 意義

LLブックの「LL」は、スウェーデン語の“Lättläst”の省略で、英語では“easy-to-read”，日本語では「読みやすい（やさしく読める）」という意味を表す。つまりLLブックとは、知的障害者を中心として障害や社会的環境により一般の書籍を読むことが難しい人たちへ読書の楽しみや必要な情報を届けることを目的に、わかりやすく表現された本をいう。わかりやすいといっても、幼い子ども向けの本ではない。生活年齢に見合った内容が、わかりやすく読みやすくする工夫を凝らして制作された本である。

知的障害者は、生活年齢が上がっても知的能力の上昇は緩やかである。例えば、生活年齢は20歳であっても、人によっては知的能力が6歳や3歳程度であったりする。そうすると、知的年齢で読める本は、ひらがなを読み始めた6歳児や文字の読めない3歳児が好む本に限られてしまう。

どのような障害があっても、生活経験は加齢とともに積みれ、その時間の経過のなかで興味や関心は変化していく。20歳の人は、知的年齢がたとえ4歳程度であっても、20年のなかで教育を受け、日常生活でさまざまな経験をしてきている。スポーツが好きの人、恋人がほしい人、旅行に行きたい人、ゲーム好きの人、自然災害や生活にかかわる社会的事象について知りたい人など、さまざまに興味・関心が広がっていることだろう。そうすると、それらの内容を扱った本などに興味が出てくるのは自然なことといえる。しかし、これらが一般書であれば難しく読むことはできない。大人になるほど、読める本が少なくなるため、読書への興味や要求が高まらず、情報や知識を得る機会が少なくなるという悪循環に陥る。

以前、青年になった知的障害者の母親が、特別支援学校で高等部になって

も、幼児用の絵本を与えられていたことについて、「情けない気持ちだった」と嘆いていたことがある。絵本じたいは何歳になっても楽しめるものだが、小学校から高等部までずっと絵本を読まざるをえない状況は不自然であり、当事者の自尊心を傷つけ、興味・関心の拡がりを阻害する。彼が恋人がほしい、旅行に行きたいと思ったら、恋愛や温泉などを扱った本を好むだろう。わかりやすいラブストーリーや温泉めぐりのガイドブック等があれば、読む楽しみが広がるにちがいない。

このようにLLブックは、生活年齢の上昇によって読みたい本と読める本の差が開いていく人たちに、生活年齢に合う読みたい内容をわかりやすい表現で届ける。読むことへの困難さをもつ人たちの自尊心を尊重し、読む・知る権利を保障する本である。

### 3.1.2 ジャンル

興味・関心の幅が狭いと考えられている知的障害者であるが、いろいろなジャンルの本に興味をもっていることが、本書2章2.2.1内「知的障害者が求める本についての調査」(pp. 32-35 参照)で明らかになった。

スウェーデンのLLブックについて、LLセンター元所長のプロール・トロンバッケ氏は2005(平成17)年の講演において「おおむね他の出版社が出す一般書と同じような内容の本を出版しています。(中略)LLブックとして直接書き下ろしたものや、古典やすでに出版されている本をLLブック版に書き直したものを出版しています」と述べた<sup>1</sup>。2025(令和7)年現在も、スウェーデンでは、この言葉どおりに一般の出版物と同じジャンルのLLブックが制作されている。

以下に、MTMの分類を参考に、スウェーデンで出版されているジャンルを示す。日本でも、多様なジャンルの出版をめざしてほしい。

---

1 プロール・トロンバッケ「やさしく読めることの意義とスウェーデンのLLブック出版」藤澤和子、服部敦司編著『LLブックを届ける：やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読者へ』読書工房、2009、p.45.

- フィクション

古典文学／恋愛／冒険・スリラー／推理小説／歴史小説／ユーモア／エッセイ・詩

- ノンフィクション

伝記／動物と自然／社会／宗教／スポーツ／健康・暮らし・料理／芸能・アート／趣味・実用

### 3.1.3 テーマや内容

日本で出版されている LL ブックのテーマは、知的障害者の生活に役立つ情報を伝えるための手引きや教育的な内容が多い。例えば、全国手をつなぐ育成会連合会が出版している「自立生活ハンドブック」シリーズや、国土社の「ひとりでできるかな？」シリーズがあげられる。これらは当事者が自立して生活するために必要な知識や具体的な方法をわかりやすく説明している。健康、病気、日常生活、仕事、料理、性、住居など、さまざまなテーマを取り上げている。

次に多いのは知的障害者の生活を描いたドキュメンタリーである。大阪府立金剛コロニー AAC 研究班監修の『ひろみとまゆこの2人だけのがいしゅつ：バスにのってまちまで』（清風堂書店出版部）は、コロニーで生活するひろみとまゆこが、街に出かけて食事をしたり買い物をしたりするひとときを描いている。埼玉福祉会の「仕事に行ってきます」シリーズは、さまざまな職業につく主人公の仕事がある一日を紹介している。

上記とは異なり、娯楽性のある LL ブックもある。文字を使わず写真だけで四コママンガ風に表現した樹村房の「写真版 LL ブック」シリーズは、文字が読めない人も読める人もいっしょに笑って楽しめる本として制作されている。